

原 著

## 鈴木伸哉<sup>1</sup>・能城修一<sup>2</sup>：東京都新宿区崇源寺・正見寺跡から出土した江戸時代の木棺の形態と樹種

Shinya Suzuki<sup>1</sup> and Shuichi Noshiro<sup>2</sup>: Materials and forms of wooden coffins of the Edo period excavated from the Sugen-ji and Shoken-ji sites, Shinjuku, Tokyo

**要 旨** 東京都新宿区崇源寺・正見寺跡の17世紀後半～19世紀前半を主体とする2つの寺院跡の一般都市住民層の墓域より出土した木棺の用材の樹種と形態を検討し、当時の身分・階層差と森林資源状況の変化の影響を評価した。円形木棺257基と方形木棺178基の部材902点について、樹種同定と、長さ・厚さの計測、木取りの観察、部材の枚数の計数をおこなった。崇源寺・正見寺の両墓域とも、円形木棺ではスギが、方形木棺ではモミ属とアカマツがそれぞれ主体であり、これは将軍家や大名家の木棺用材とはまったく異なり、当時の身分・階層の差が木棺用材に反映していた。円形木棺用材は、17世紀後半～18世紀初め頃まではアスナロやヒノキ・サワラが多く用いられていたのに対し、時期が下るにつれてスギやアカマツ、モミ属などに置き換わり、各部材の厚さは横ばいか厚くなった。文献史学や植生史研究の成果と対比し、崇源寺・正見寺跡から出土した円形木棺用材は、17世紀後半～18世紀はじめ頃までは木曾川・天竜川流域の天然林からもたらされた移入材であったが、時期が下るにつれて、天然林資源の枯渇と、江戸近郊における木材生産の活発化や植林と、「江戸地廻り経済圏」の発達によって青梅・西川地域などの江戸近郊の天然林や人工林からもたらされた木材に置き換わったと考えた。

キーワード：江戸、江戸時代、森林資源、身分と階層、木棺

**Abstract** We analysed 902 coffin boards of 257 tub-shaped and 178 box-shaped wooden coffins used in the graveyards for commoners at the Sugen-ji and Shoken-ji sites, Tokyo, and discussed the influence of the social hierarchy and the shortage in timber resources on timber usage in Edo during the early modern Edo period. Tub-shaped and box-shaped coffins were mainly made of *Cryptomeria japonica* and of *Abies* and *Pinus densiflora*, respectively, different to the coffins of the Shogun and Daimyo families. During the second half of the 17th century to the early 18th century, tub-shaped coffins at both graveyards were mostly made of taxa probably brought from natural forests along the Kiso and Tenryu valleys, such as *Thujopsis dolabrata*. In later periods, they were made of taxa grown in surrounding mountains of Edo. Boards of tub-shaped coffins were equally thick or became thicker in later ages, not reflecting the scarcity of timber resources. These trends seem to have resulted from the strengthened forest regulations after depletion of natural forests throughout Japan during the 17th century, the extensive plantation of *Cryptomeria japonica* started at the beginning of the 18th century, and the establishment of a local commercial system in the vicinity of Edo in later periods.

**Key words:** Edo, Edo period, forest resource, social hierarchy, wooden coffin

### はじめに

東京都内の近世墓の調査・研究は、土農工商などの身分や、大名・旗本・御家人といった身分内における階層からなる身分制度のあり方を墓制から復原すること、また、墓制から都市社会史の一面を読み取ることを主な目的として行われてきた。河越（1965）による人類学的見地からの先駆的業績や、徳川将軍墓の調査（鈴木ほか、1967）をはじめとして、近世遺跡調査の本格化（都立一橋高校内遺跡調査団、1985など）にしたがって調査事例が増しつつあり、埋葬施設に用いられた甕の編年（扇浦、1987）や、副

葬された六道銭の分析（鈴木、1988）などにより、詳細な時間軸に依った研究がおこなわれている。

幕藩体制を支えた身分制度は、17世紀前半に確立し、身分にしたがった規定が生活の諸面に及んだとされ（児玉、1963）、こうした変化は発掘された墓地における墓制の変化によっても確認されている（谷川、2004）。一方、木材をはじめとする近世（織豊政権期と江戸時代）の森林資源については、度重なる火災や開発の進展などにより、全国的な枯渇の状況にあったと推定されている（所、1980；Totman, 1989；水本、2003）。鈴木・能城（2004）は、

<sup>1</sup> 〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15 早稲田大学人間科学学術院

Faculty of Human Sciences, Waseda University, 2-579-15 Mikajima, Tokorozawa, Saitama 359-1192, Japan

<sup>2</sup> 〒305-8687 筑波農林研究団地内郵便局私書箱 16号 森林総合研究所木材利用部

Forestry and Forest Products Research Institute, Tsukuba Norin P. O. Box 16, Ibaraki 305-8687, Japan

東京都中央区八丁堀三丁目遺跡の17世紀前半を主体とする一般都市住民層の墓域から出土した木棺の形態と樹種を人間と森林環境との関わり観点から分析し、同時期の江戸の木棺の用材に、確立期にある身分制度と森林資源枯渇の影響を認めた。

しかしながら、これまでも17世紀後半以降の墓域の調査例はいくつかあったものの、木棺用材の調査・研究はわずかであった。こうしたなか、2003年5月から11月にかけて東京都新宿区崇源寺・正見寺跡の発掘調査がおこなわれ、1434基の埋葬施設をはじめ、近世墓地遺跡の資料が多数得られた。本稿では、同遺跡から出土した木棺材902点をもとに、身分制度がすでに確立された時期である17世紀後半以降の身分・階層差と、木材をはじめとする森林資源状況の変化が、木棺用材にどのような影響を与えたのかを明らかにする。なお、資料および研究の一部は、発掘調査報告書に公表している(鈴木・能城, 2005)。

#### 調査地点の概要と調査方法

##### 1. 調査地点の概要

調査地点である崇源寺・正見寺跡は、北緯35度40分35秒、東経139度43分42秒、東京都新宿区南元町24に位置する(図1)。

調査地点周辺の鮫河橋は、江戸時代には小規模の寺院が数多く存在する地域であった。このうち調査地点には、崇源寺と正見寺という2つの寺院が存在していたことが文献史料の調査から明らかにされている。崇源寺は浄土宗知恩院の末寺で寛永3年(1626)に下谷(現在の文京区湯島付近)に起立し、その後、赤坂への移転を経て、承応2年

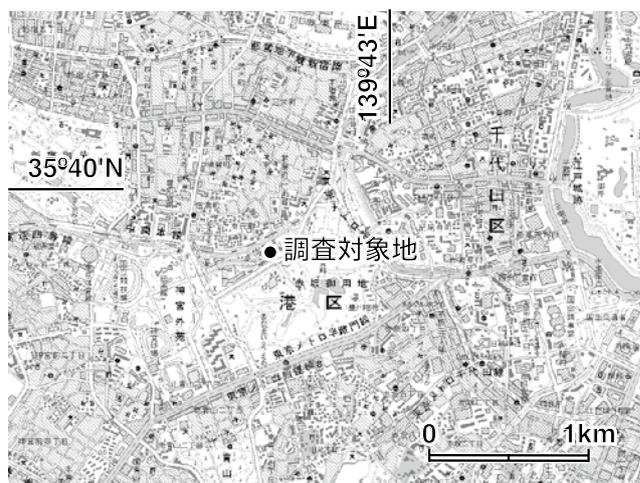


図1 新宿区崇源寺・正見寺跡の位置。地形図は国土地理院発行1:25,000「東京西部」を使用。

Fig. 1 Sugen-ji and Shoken-ji sites at Shinjuku, Tokyo. Based on the 1:25,000 topographical map "Western Tokyo" issued by the Geographical Survey Institute of Japan.

(1653)に調査地点に転入し、明治32年(1899)の火災によって現在の愛知県岡崎市に転出した。正見寺は浄土真宗本願寺派の末寺でももとは近江国に起立し、数次の移転を経て寛文7年(1667)に調査地点に転入し、明治42年(1909)に転出するまで同地に存続していた。

##### 2. 年代と被葬者

調査の結果、標高11~16m、現在の地表下1~6m付近から、1434基の埋葬施設を主体とする墓域と、3軒

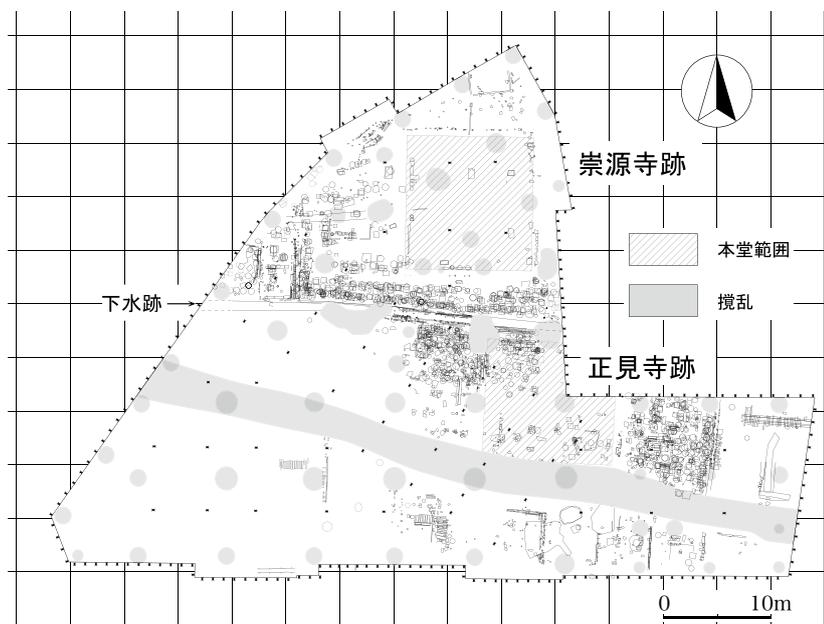


図2 新宿区崇源寺・正見寺跡の遺構分布(大成エンジニアリング株式会社, 2005を改変)。

Fig. 2 Remains at the Sugen-ji and Shoken-ji sites at Shinjuku, Tokyo (modified from Taisei Engineering Co., 2005).

表1 新宿区崇源寺・正見寺跡出土の埋葬施設  
Table 1 Burial remains at the Sugan-ji and Shoken-ji sites

埋葬施設	寺院	
	崇源寺	正見寺
円形木棺	202	273
方形木棺	153	149
甕棺	84	94
土器棺	63	41
蔵骨器	41	257
直葬	6	21
再埋葬	30	20

の本堂跡を主体とする寺院跡が検出された（図2）。墓域は調査地点の中央付近を東西に横切る下水跡によって2つに分けられ、北側が崇源寺跡に、南側が正見寺跡に比定された。

埋葬施設には土葬墓と火葬墓があり、土葬墓は円形木棺475基（崇源寺202基、正見寺273基）と、方形木棺302基（崇源寺153基、正見寺149基）、甕棺178基（崇源寺84基、正見寺94基）が主体である（図3）。火葬墓は蔵骨器298基（崇源寺41基、正見寺257基）が主体である（表1）。正見寺墓域では火葬墓が多く出土したが、これは浄土真宗を信仰する地域に火葬が多く見られるという民俗例（井ノ口，1977）との関連が考えられている（大成エンジニアリング株式会社，2005）。それ以外の埋葬施設では、寺院による組成に大きな違いは認められなかった。

埋葬施設の形成された年代は、遺構の検出された層位や標高と、遺構・副葬品の製作年代や記年銘資料をもとに決定された（大成エンジニアリング株式会社，2005）。崇源寺墓域の埋葬施設は17世紀後半から19世紀中葉～後葉に比定され、正見寺墓域の埋葬施設は17世紀中葉～後葉

から19世紀前葉～後葉に比定された。

寺院に残された過去帳や出土した墓碑銘によると、両寺院の墓の被葬者は周辺の商人・町人や近くに上屋敷があった紀州藩の下級武士が中心である。出土人骨の調査によると、被葬者の年齢層は成人と未成年の割合が2対1で、性別は男女比が2対1であった。

### 3. 資料と分析方法

身分・階層差や森林資源の変化が埋葬施設に与える影響を捉えるため、木棺の種類内・種類間における用材の樹種と形態を検討した。

円形木棺257基と方形木棺178基の部材902点を採取し、樹種同定と、長さ・厚さの計測、木取りの観察、部材の枚数の計数をおこなった。出土した木棺材のうち、試料の採取が可能なのは、側板・底板・盖板から各1点ずつ木材切片を直接採取した。樹種同定は木材切片のプレパラート観察によりおこなった。木製品から採取した木材切片をガムクロラルで封入して同定用プレパラートとした。プレパラートにはSSJ0001～1224の標本番号を付した。それらは出土資料とともに新宿区教育委員会に保管されている。

## 結 果

### 1. 樹種同定

同定された9樹種の木材解剖学的な記載をし、同定の根拠を明らかにする（図4-1, 4-2）。

モミ属 *Abies* マツ科（図4-1: 1a-1c）

通常は垂直・水平樹脂道のいずれをも欠く針葉樹材。ときに傷害樹脂道が認められる。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量多く明瞭。仮道管の内壁にらせん肥厚

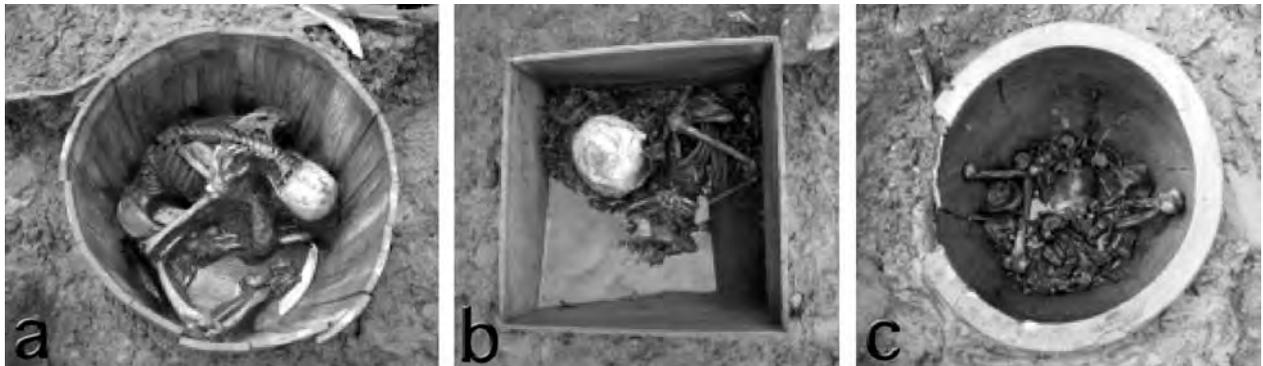


図3 新宿区崇源寺・正見寺跡出土の円形木棺（a，崇源寺451号墓）と、方形木棺（b，崇源寺481号墓）、甕棺（c，崇源寺528号墓）（大成エンジニアリング株式会社，2005）。

Fig. 3 Tub-shaped (a, Sugan-ji no. 451) and box-shaped (b, Sugan-ji no. 481) wooden coffins and a pottery coffin (c, Sugan-ji no. 528) recovered at the Sugan-ji and Shoken-ji sites (Taisei Engineering Co., 2005).

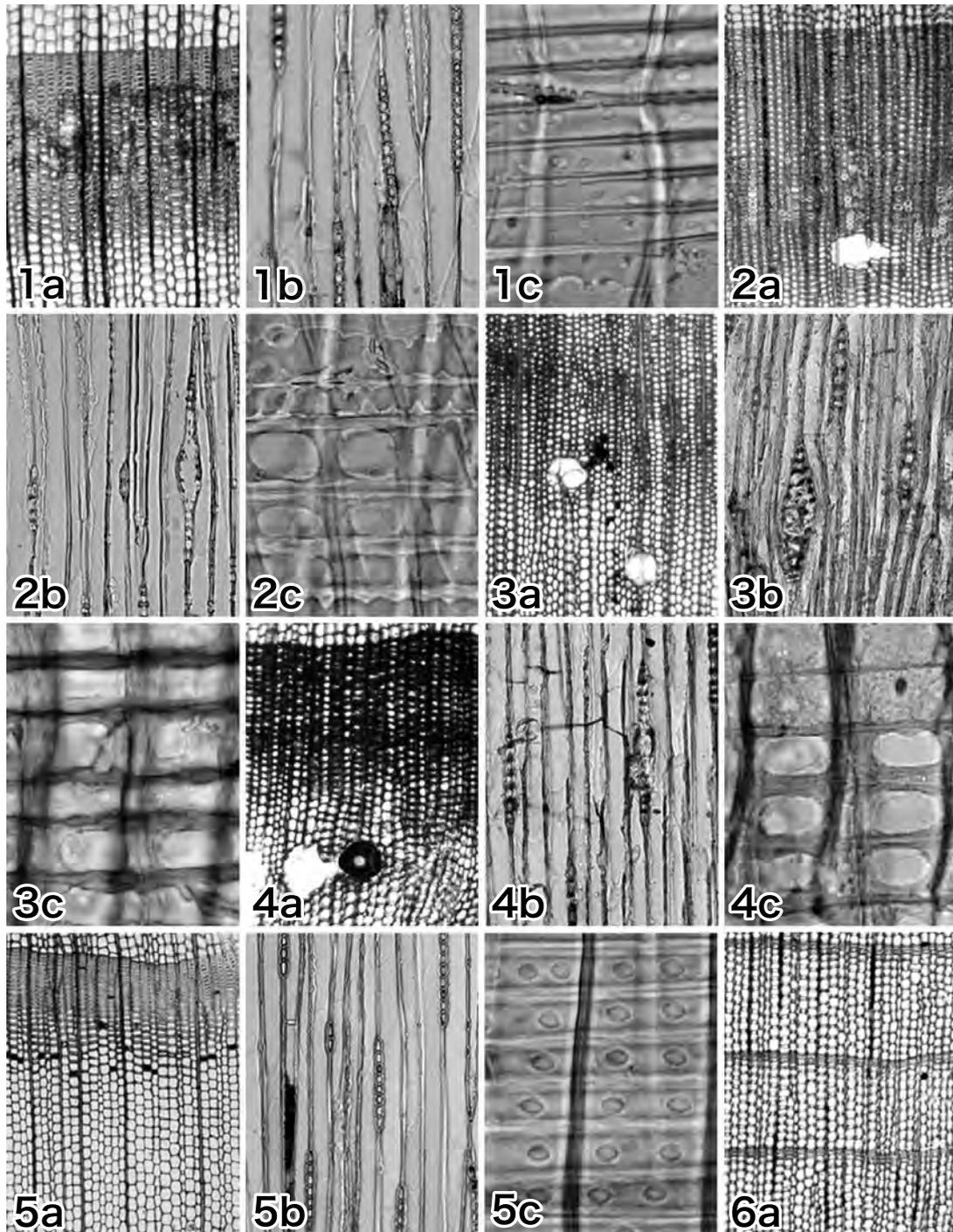


図4-1 新宿区崇源寺・正見寺跡出土木棺材の顕微鏡写真(1)。1a-1c: モミ属(崇源寺363号円形木棺底板。SSJ0463), 2a-2c: アカマツ(崇源寺307号円形木棺底板。SSJ0380), 3a-3c: クロマツ(正見寺72号上号方形木棺蓋板。SSJ0696), 4a-4c: マツ属単維管束亜属(正見寺317号方形木棺側板。SSJ0785), 5a-5c: スギ(崇源寺231号円形木棺底板。SSJ0299), 6a: ヒノキ(正見寺832号円形木棺底板。SSJ1005)。a: 横断面×36, b: 接線断面×90, c: 放射断面×360。

Fig. 4-1 Microphotographs of coffin boards recovered at the Sugan-ji and Shoken-ji sites (1). 1a-1c: *Abies* (bottom board, Sugan-ji no. 363 tub-shaped coffin. SSJ0463), 2a-2c: *Pinus densiflora* (bottom board, Sugan-ji no. 307 tub-shaped coffin. SSJ0380), 3a-3c: *Pinus thunbergii* (lid board, Shoken-ji no. 72 (upper) box-shaped coffin. SSJ0696), 4a-4c: *Pinus* subgen. *Haploxylon* (side board, Shoken-ji no. 317 box-shaped coffin. SSJ0785), 5a-5c: *Cryptomeria japonica* (bottom board, Sugan-ji no. 231 tub-shaped coffin. SSJ0299), 6a: *Chamaecyparis obtusa* (bottom board, Shoken-ji no. 832 tub-shaped coffin. SSJ1005). a: cross section × 36, b: tangential section × 90, c: radial section × 360.

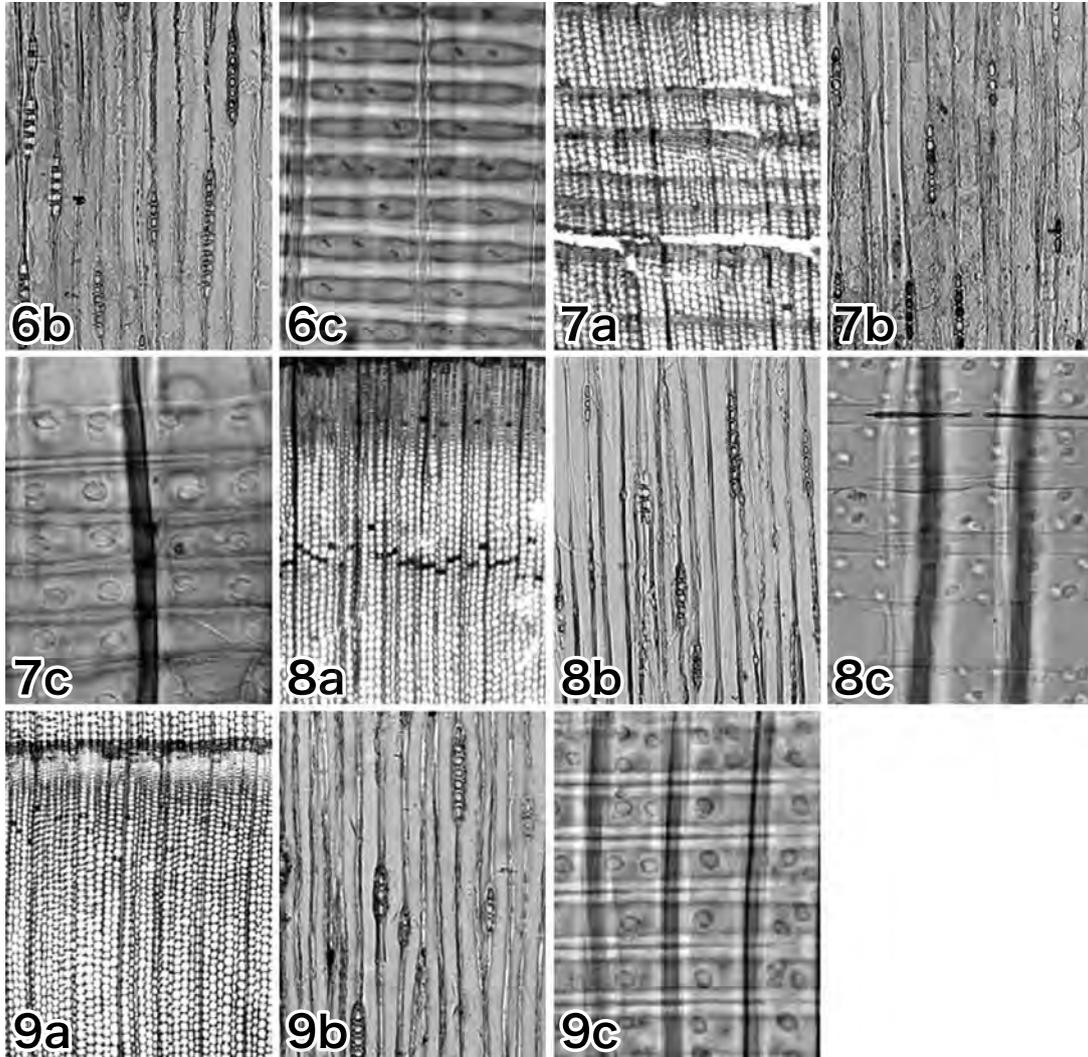


図 4-2 新宿区崇源寺・正見寺跡出土木棺材の顕微鏡写真 (2)。6b-6c: ヒノキ (正見寺 832 号円形木棺底板。SSJ1005), 7a-7c: サワラ (崇源寺 193 号方形木棺底板。SSJ0267), 8a-8c: アスナロ (崇源寺 260 号円形木棺側板。SSJ0330), 9a-9c: ネズコ (崇源寺 94 号円形木棺側板。SSJ0134)。a: 横断面  $\times 36$ , b: 接線断面  $\times 90$ , c: 放射断面  $\times 360$ 。

Fig. 4-2 Microphotographs of coffin boards recovered at the Sugan-ji and Shoken-ji sites (2). 6b-6c: *Chamaecyparis obtusa* (bottom board, Shoken-ji no. 832 tub-shaped coffin. SSJ1005), 7a-7c: *Chamaecyparis pisifera* (bottom board, Sugan-ji no. 193 box-shaped coffin. SSJ0267), 8a-8c: *Thujopsis dolabrata* (side board, Sugan-ji no. 260 tub-shaped coffin. SSJ0330), 9a-9c: *Thuja standishii* (side board, Sugan-ji no. 94 tub-shaped coffin. SSJ0134). a: cross section  $\times 36$ , b: tangential section  $\times 90$ , c: radial section  $\times 360$ .

は認められない。放射組織は柔細胞のみからなり、壁は厚く、垂直壁はじゅず状末端壁。分野壁孔はごく小型のスキ型で、1分野に1~4個。日本に自生するおもなモミ属には、ウラジロモミ *A. homolepis* と、トドマツ *A. sachalinensis*, モミ *A. firma*, シラビソ *A. veitchii*, オオシラビソ *A. mariesii* がある。

アカマツ *Pinus densiflora* Siebold et Zucc. マツ科 (図 4-1: 2a-2c)

垂直・水平樹脂道をもつ針葉樹材。早材から晩材への移行は急で、晩材は量多く明瞭。エピセリウム細胞は薄壁で、ふつうは残っていない。放射仮道管の水平壁には著しい鋸歯状の突起がある。分野壁孔は大型の窓状で、1分野にふつう1個。放射仮道管の水平壁の鋸歯状突起が2重に見えるものをアカマツと同定した。

クロマツ *Pinus thunbergii* Parl. マツ科 (図 4-1: 3a-3c)

垂直・水平樹脂道をもつ針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材は量多く明瞭。エピセリウム細胞は薄壁で、ふつうは残っていない。放射仮道管の水平壁には低い山状の突起がある。分野壁孔は大型の窓状で、1分野にふつう1個。鋸歯が明瞭に見えず、アカマツとクロマツとの区別が困難なものはマツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* とした。

マツ属単維管束亜属 *Pinus* subgen. *Haploxylon* マツ科 (図 4-1: 4a-4c)

垂直・水平樹脂道をもつ針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の量は少ない。エピセリウム細胞は薄壁で、ふつうは残っていない。放射仮道管の水平壁は平滑。分野壁孔は大型の窓状で、1分野にふつう1個。日本に自生するおもなマツ属単維管束亜属には、ハイマツ *P. pumila*, チョウセンゴヨウ *P. koraiensis*, ヤクタネゴヨウ *P. armandii*, ゴヨウマツ *P. parviflora* がある。

スギ *Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don スギ科 (図 4-1: 5a-5c)

ヒノキに似る針葉樹材。早材は大型で薄壁の仮道管からなり、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量多く明瞭。樹脂細胞が早材の終わりから晩材にかけて接線方向に散在する。仮道管内壁にらせん肥厚は認められない。分野壁孔は大型で孔口が水平に開くスギ型で、1分野に1~2個。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 (図 4-1: 6a, 図 4-2: 6b-6c)

垂直・水平樹脂道のいずれをも欠く針葉樹材。早材か

ら晩材への移行は緩やかで、晩材の量はごく少ない。樹脂細胞が早材の終わりから晩材にかけて接線方向に散在する。仮道管の内壁にらせん肥厚は認められない。分野壁孔は中型で孔口が縦に開くトウヒ型~ヒノキ型で、1分野に2~3個。分野壁孔が明瞭に見えず、属や種の区別が困難なものはヒノキ科とした。

サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 (図 4-2: 7a-7c)

ヒノキに似る針葉樹材。晩材は比較的多い。分野壁孔はやや大きく孔口が斜めに開くヒノキ型~スギ型で、1分野に2~3個。

アスナロ *Thujopsis dolabrata* (L. f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 (図 4-2: 8a-8c)

ヒノキに似る針葉樹材。晩材は比較的多い。放射柔細胞は樹脂を多く含む。分野壁孔は小さく孔口が斜めに開くヒノキ型~スギ型で、1分野に3~5個。これにはヒノキアスナロ (ヒバ) *T. dolabrata* var. *hondai* も含まれる。

ネズコ *Thuja standishii* (Gordon) Carr. ヒノキ科 (図 4-2: 9a-9c)

ヒノキに似る針葉樹材。晩材は比較的多い。分野壁孔は中型のスギ型で、1分野に2~3個。

## 2. 円形木棺

円形木棺の用材はスギを主体とする。正見寺墓域の円形木棺用材を時期別に見ると、17世紀中葉~18世紀初頭にはアスナロを中心とし、これにヒノキが次いでいたのが、

表2 新宿区崇源寺・正見寺跡出土の木棺材の樹種 (括弧内は転用材)

Table 2 Taxa used for coffin boards at the Sugan-ji and Shoken-ji sites (parentheses: no. of coffin boards converted from other items)

分類群	崇源寺								正見寺								
	円形木棺			方形木棺					円形木棺				方形木棺				
	蓋板	側板	底板	蓋板	側板	底板	棧	不明	蓋板	側板	底板	不明	蓋板	側板	底板	棧	不明
モミ属	2	3	41(1)	10	68	52	1	6	4	4	10		1	16	10		9
アカマツ	1	1	27	5	28	20		4		22				7	3		6
クロマツ													1				
複維管束亜属			2		6			3	1		2		1		1		1
単維管束亜属															2		
マツ属										1					2		
スギ	40	112 (1)	62 (9)	18	12	16	5	3	15	44 (1)	30 (4)	1		3	5	1	2
ヒノキ	4	8 (1)	5 (1)		1		1		5	20	9		1				
サワラ	5 (1)	6	2	2	1	4	1	1	3	7	4						1
アスナロ	3	7	3				2	1	4	16	13						
ネズコ	2	3		1							3						

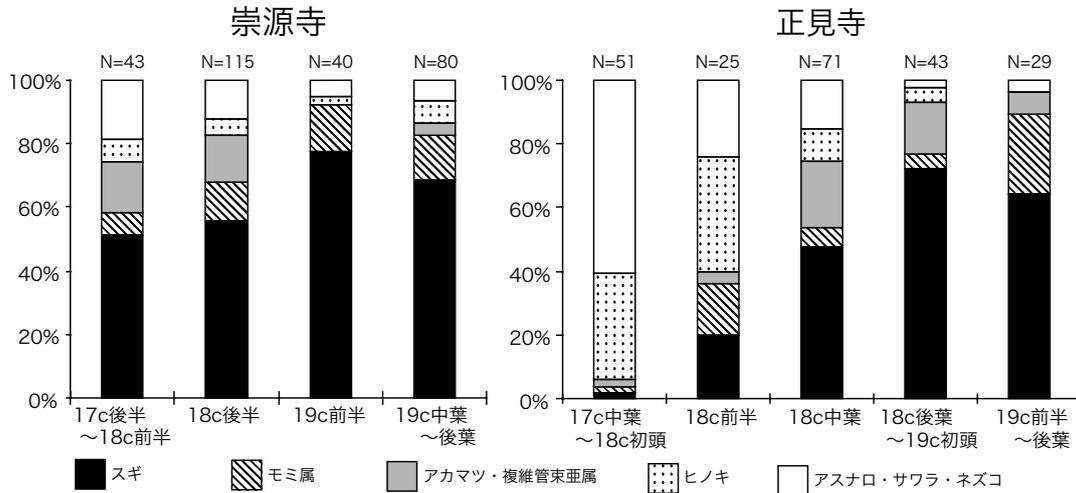


図5 新宿区崇源寺・正見寺跡出土の円形木棺の時期別樹種組成。  
 Fig. 5 Taxonomic composition of coffin boards of tub-shaped coffins at the Sugenshi-ji and Shoken-ji sites.

時期が下るにつれてスギの占める割合が増加し、18世紀後葉～19世紀初頭には70%を超える(表2, 図5)。また18世紀中葉以降には、底板にモミ属やアカマツ・複雑管束亜属を多く用いるようになる。崇源寺墓域では、17世紀後半～18世紀前葉にはアスナロ・サワラ・ネズコとヒノキの占める割合が20%を超え、スギの占める割合が50%ほどであったのが、時代が下るにつれてスギの占める割合が増加し、19世紀前葉には70%を超える(図5)。また17世紀後半以降19世紀中葉～後葉に至るまで、アカマツ・複雑管束亜属またはモミ属が底板に多く用いられている。

樹種により木取りが異なっていて、アスナロ・サワラ・ネズコとヒノキの材132点では、柾目と追柾目が50%であるのに対して、スギの材304点では板目が76%、アカマツ・複雑管束亜属およびモミ属の材119点では板目が79%であった。

遺構ごとの側板と底板の樹種は、184基のうち113基(61%)で一致した(表3)。このうちでは、スギが51基ともっとも多く、アスナロが11基とこれに次いだ。17世紀中葉～18世紀初頭までの古い段階ではアスナロのみを用いる傾向が強かった。一致しなかったものは、側板がスギで底板がアカマツ・複雑管束亜属のものが31基ともっとも多く、側板がスギで底板がモミ属のものが29基とこれに次いだ。部材にスギを用いたものは135基(73%)と大半を占め、スギを中心とした用材選択がなされていたが、底板にアカマツやモミ属の材を多く用いるように、部位による樹種の使い分けが認められた。

両寺院の墓域から出土した円形木棺は、側板・蓋板が厚さ8mm前後で底板が10～14mm前後であり、底板が側板・蓋板より2～6mmほど厚い(図6)。両寺院の墓域のすべての時期で、底板と側板との間には危険率5%で

表3 新宿区崇源寺・正見寺跡出土の円形木棺・方形木棺部材の樹種の組み合わせ  
 Table 3 Taxonomic combination between bottom and side boards at the Sugenshi-ji and Shoken-ji sites

	円形木棺								方形木棺			
	底板								底板			
	サワラ	スギ	ヒノキ	アスナロ	ネズコ	アカマツ	モミ属	サワラ	スギ	アカマツ	モミ属	
側板	1	2	2			3	2					
	3	51	2	2	4	31	29	6			1	
	1	3	7	3	1	5	4				1	
		2	2	11		2	3					
		1					1					
		1								19	1	
		4					1	2	11	2	46	
									1			

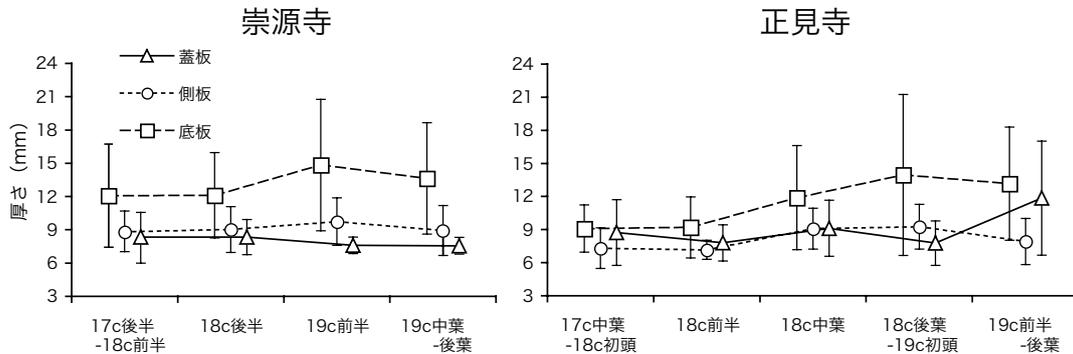


図6 新宿区崇源寺・正見寺跡出土の円形木棺材の厚さ。崇源寺墓域出土資料では、同定した338資料のうち詳細な年代の明らかな278点を用いた。底板の厚さは、崇源寺墓域では17c後半から18c後半と19c前半以降との間に、正見寺では17c中葉から18c中葉と18c後葉から19c後葉との間に、それぞれ危険率5%で有意差があった。記号は平均値、棒は1標準偏差。

Fig. 6 Thickness of coffin boards of tub-shaped coffins at the Sugan-ji and Shoken-ji sites. Thickness differed at 5% significance level between late 17c to late 18c and from early 19c onward at the Sugan-ji site and between mid 17c to mid 18c and late 18c to late 19c at the Shoken-ji site. Symbols: mean, bars: one standard deviation.

厚さに有意差があった。側板・蓋板の各部材の厚さを時期別に見ると、崇源寺墓域出土円形木棺では17世紀後半から19世紀後半にかけておおむね横ばいで、底板は19世紀前半頃を境にやや厚くなった。正見寺墓域出土円形木棺でもおおむね横ばいで、底板は18世紀中葉頃を境に時期が下るにつれてやや厚くなった。

底板の厚さの平均は樹種によって異なっており、モミ属50点では12.8 mm、アカマツ・複維管束亜属53点では11.5 mm、スギ90点では14.7 mm（このうち転用材13点では24.2 mm）、ヒノキ14点では10.4 mm、アスナロ・サワラ・ネズコ25点では9.5 mmであった。すなわち底板はスギ材のものが厚く、とくに転用材がもっとも厚い。

そして、モミ属、アカマツ・複維管束亜属、ヒノキ、アスナロ・サワラ・ネズコの順に薄くなった。

円形木棺1基あたりの底板の枚数も樹種によって異なり、モミ属を用いた23基では2.69枚、アカマツ・複維管束亜属を用いた23基では2.90枚、スギを用いた42基では3.59枚、ヒノキを用いた13基では3.84枚、アスナロまたはサワラまたはネズコを用いた23基では4.21枚であった。このように、1基あたりの底板の枚数はモミ属製のものがもっとも少なく、したがって1基の底板を製作するのに使われた板材どうしの接合箇所の数をもっとも少なかった。以下、アカマツ・複維管束亜属、スギ、ヒノキ、アスナロ・サワラ・ネズコの順に接合箇所は多くなっていった。

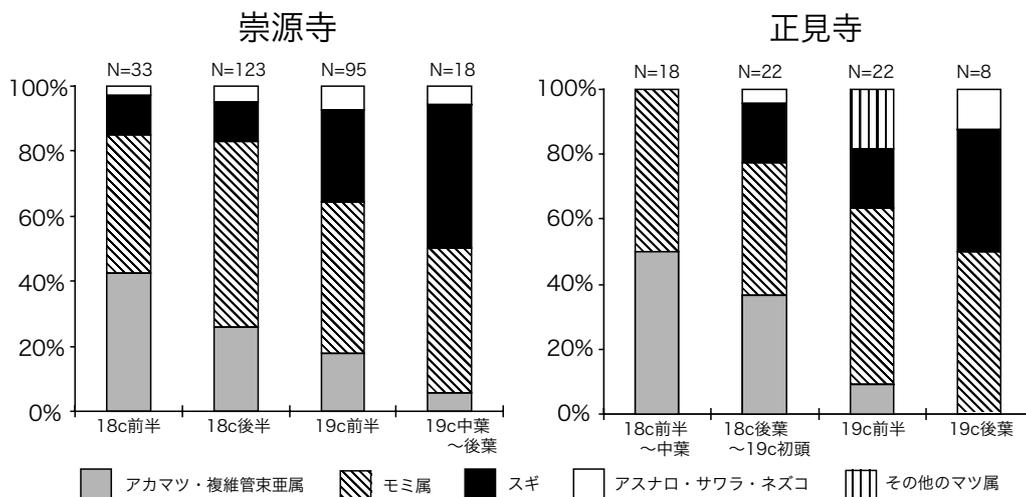


図7 新宿区崇源寺・正見寺跡出土の方形木棺の時期別樹種組成。

Fig. 7 Taxonomic composition of coffin boards of box-shaped coffins at the Sugan-ji and Shoken-ji sites.

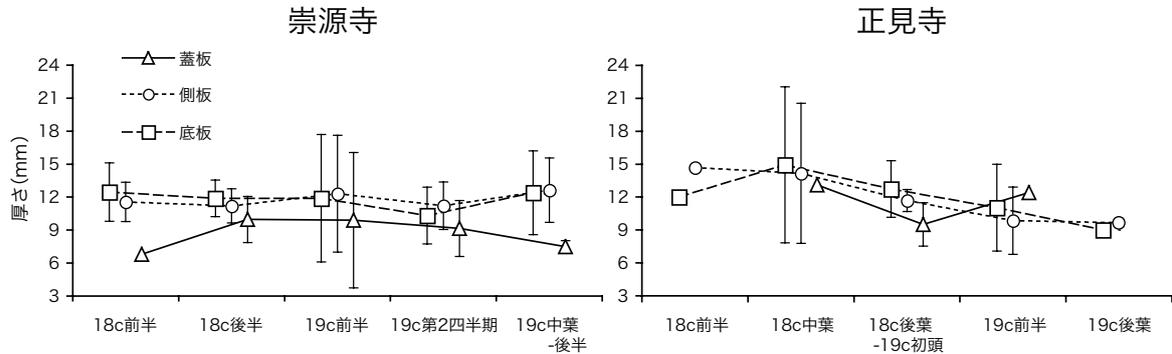


図8 新宿区崇源寺・正見寺跡出土の方形木棺材の厚さ。記号は平均値、棒は1標準偏差。

Fig. 8 Thickness of coffin boards of box-shaped coffins at the Sugan-ji and Shoken-ji sites. Symbols: mean, bars: one standard deviation.

### 3. 方形木棺

方形木棺の用材は両寺院墓域ともモミ属が半数近くを占め、アカマツ・複雑管束亜属とスギがこれに次いだ。これを時期別にみると、いずれの時期でもモミ属が40～50%を占めて用材の主体をなすが、それ以外では18世紀前半～中葉に40%以上を占めていたアカマツ・複雑管束亜属が時期が下るにつれて減少し、かわってスギが増加した(図7)。

遺構ごとの側板と底板の樹種は90基のうち71基(79%)で一致した(表3)。このうちではモミ属が46基ともっとも多く、アカマツ・複雑管束亜属が19基とこれに次いだ。一致しなかったものでは、側板がモミ属で底板がスギのものが11基ともっとも多かった。部材にモミ属やアカマツ・複雑管束亜属を用いたものは83基(92%)と大半を占め、側板と底板の樹種の一致率も高いことから、ひとつの方形木棺はモミ属やアカマツを中心とした単一の樹種で製作されることが多かった。

両寺院の墓域から出土した方形木棺は、側板・底板が厚さ11～12mm前後で蓋板が9mm前後であり、側板・底板が蓋板より2～3mmほど厚い。崇源寺では、蓋板と側板・底板との間には18世紀後半と19世紀中葉～後半に、蓋板と側板との間には19世紀第2四半期に、側板と底板との間には18世紀後半に、それぞれ危険率5%で有意差があった。蓋板・側板・底板の厚さを時期別に見ると、崇源寺墓域出土方形木棺ではおおむね横ばいであるのに対して、正見寺墓域出土方形木棺では側板と底板が時期が下るにつれて薄くなる傾向が認められた(図8)。木取りは蓋板・側板・底板のいずれも板目が85%とほとんどを占めた。

## 考 察

### 1. 木棺の種類間における用材選択

崇源寺・正見寺の両墓域とも、円形木棺ではスギが、また方形木棺ではモミ属とアカマツがそれぞれ主体であった。

木棺の種類によって木材が使い分けられており、両寺院墓域の傾向が一致することから、こうした使い分けはこの地域ではある程度一般的なものであったと考えられる。

円形木棺と形のうえで共通する桶や樽には、江戸時代から明治時代ではスギが多く用いられたことが『和漢三才図会』(寺島, 1712a)や『木材ノ工藝的利用』(農商務省山林局, 1912)などから知られており、また方形木棺に多用された樅(モミ)は「其の材板に作り、用いて櫃箱と為す」(『和漢三才図会』寺島, 1712b)とされ、共通する用材選択が認められる。したがって、これらの木棺の用材選択は木棺のみに限定される特殊なものではなく、同時代の一般的な用材をある程度反映していると考えられることができる。

### 2. 円形木棺

円形木棺ではいずれの部材にもスギが多く用いられているが、底板にはモミ属とアカマツも比較的多く使われている。側板と底板の樹種の対応をみると、17世紀中葉～18世紀初頭までの古い段階ではアスナロのみを用いる傾向が強かったものが、時期が下るにつれて部位による多様な樹種の使い分けが認められるようになる。底板は側板や蓋板よりも材が厚く、必要とされる強度の違いを考慮して製作されたと推定され、時期が下るにつれて厚くなる。1基あたりの底板の枚数は、アスナロやスギのものと比較するとモミ属やアカマツでは少なく、接合箇所も少ない。これらのことから考えると、時代が下るにつれて底板の強度を増すために厚手で幅の広い材が必要となり、モミ属やアカマツなど、江戸近郊で大径木が得やすい樹種が選ばれたと想定される。モミ属の材は水湿に弱く、アカマツの材は樹脂を多く含み、いずれも桶や樽の材には向かない。『和漢三才図会』(寺島, 1712a)では、桶の用材について、「其の木杉を以つて上と為す。槓之れに次ぐ。柁樅又之れに次ぐ。其の他は朽ち易し」とする。こうした材が円形木棺に多く

使われるようになるのは、円形木棺が桶や樽などからの分化が進み、専用の棺としての機能を考慮して製作されるようになる過程を表していると考えることができよう。

### 3. 方形木棺

方形木棺材には、モミ属やアカマツなどの大径木を板目製材したものが用いられていた。円形木棺のような部位による樹種の使い分けは認められず、側板・底板は同一の樹種を用いたものが多かった。また側板と底板の厚さもほぼ一致したことから、方形木棺の製作にあたっては同一の木材から部材を切り出したと想定できる。17世紀前半の方形木棺が樹種や形態の点で多様である(蔵持・鈴木, 2003)のに対し、本遺跡出土のものは樹種や形態に一定のまとまりが認められ、17世紀前半の方形木棺と本遺跡で出土した18世紀以降を中心とする方形木棺とは系譜の異なるものであると考えられる。崇源寺跡出土の方形木棺部材の厚さは時期に関わらずおおむね一定であるのに対し、正見寺跡出土の方形木棺側板・底板は時期が下るにつれて薄くなる傾向が認められた。したがって、方形木棺の厚さの変化は当時の森林資源状況の変化とは関連がないようである。

### 4. 木棺用材の産地

本遺跡で認められた木棺用材が当時の森林資源の状況をどのように反映しているのかを検討するため、用材の産地を推定した。現在の天然分布(林, 1960; 倉田, 1971)ではアカマツやモミが全国に広く分布しているのに対し、アスナロや、ヒノキ、サワラ、ネズコは、木曾川・天竜川流域にまとまった分布があるのを除けば、日光周辺から東北地方に散在するにとどまる。花粉化石群の研究によると、関東地方では、中世から近世にかけてマツ属を中心とした二次林または植栽林が増加し、近世では優占していたことが推定されている(辻, 1987; 吉川, 1997など)。したがって、崇源寺・正見寺出土木棺に多用されている樹種のうち、アカマツとモミ属は関東地方の山林から供給されたと想定できる。一方スギは、現在の天然分布から考えると当時の関東近郊にまとまった天然林の存在を想定することはできない。しかし花粉化石群の研究からはスギの分布が推定されており(吉川, 1992; 辻本, 1995)、この背景には植林というかたちの大規模な人為的関与があったと考えられる。以下では、当時の江戸近郊における木材の生産について、文献史料研究の成果を援用し、崇源寺・正見寺跡出土の木棺用材が江戸近郊からもたらされた可能性について検討する。

江戸で用いられた木材は、江戸時代初期の木材需要を支えた「下り荷」と呼ばれる移入材と、おもに江戸時代中期

以降に発達する「地廻り荷」または「近在物」と呼ばれる近郊産の材とに分けられる。移入材のおもな産地には、三河(現在の愛知県)や、駿河・遠江(静岡県)、木曾・伊那(長野県)、紀伊(和歌山県)、土佐(高知県)があり、江戸近郊のおもな産地には、秩父(埼玉県)や、青梅(東京都)、西川(埼玉県南西部)がある(丸山, 2001)。移入材のおもなものとしては、江戸時代初期に木曾川・天竜川流域から大量にもたらされたヒノキやサワラ、アスナロなどがあり、これらの資源は寛文・延宝期(1661~1681)には枯渇したとされる(所, 1980)。江戸近郊では、青梅地方で寛文6年(1666)にすでに木材の筏流がおこなわれており(松村, 1959)、寛文期(1661~1673)には江戸近郊の森林から木材がもたらされていたことがわかる。全国における育林の開始時期については、近世の前半に地域によって散発的・試行的に行なわれ、経営を目的とする育林は近世後期に各地に成立したとする考えもあるが(藤田, 1980)、次に述べる青梅・西川の両林業地帯にかんする研究では、これをさかのぼる寛文・延宝期には植林が盛んにおこなわれていたとしている。

明治3年(1870)の史料によれば、青梅地方で生産されていた木材として、杉板や、松板、樅板、杉皮、杉丸太、杉角、薪が挙げられている(佐々, 2002)。また松村(1959)は、寛文8年(1668)検地帳に杉林の記載があることから、このころすでに植林がおこなわれていたとしている。さらに、近世中期の享保期(1716~1736)ごろからは植林事業が文献のうでで明瞭になり、スギ・ヒノキの30年生程度のものを生産・出材するようになったとされている(青梅市史編さん委員会, 1995)。この地方の特産品には木塔婆があり、その起源は元禄年間(1688~1704)といわれ、モミ材を用いて生産したといわれている(石井, 1969)。モミ材はその性質が建築材としては適当でなく、葬具類・棺桶などに多く用いられていた(農商務省山林局, 1912)。

西川林業地帯と呼ばれる地域は、入間川や、高麗川、越辺川、成木川などの荒川水系の流域であり、宝永2年(1705)の史料では樅・松・雑木の太木が多数存在する林が用材林として仕立てられており、また元禄期には「杉林」が成立していたとされている(飯能市史編集委員会, 1988)。このような人工造林は遅くとも寛文・延宝期には開始されており、元禄期になると大規模なものもあったとされ、造林された樹種はスギ・マツなどの用材目的のもので、この造林は農民が担ったとされている(加藤, 1982)。

以上のことから江戸周辺における用材の流通と生産は以下のように想定することができる。すなわち、江戸時代初期にはヒノキやサワラ、アスナロが大量に江戸にもたらされ消費された結果、寛文・延宝期には移入材は枯渇した。

一方、青梅・西川両地域ではマツやモミ材の生産がおこなわれ、これに加えてスギが植林によって生産されていた。これらの木材は青梅・西川地域の筏流しによって江戸にもたらされていた。

## 5. 木棺用材の流通

つぎに、生産された木材を江戸市中に流通させる役割を担った問屋・仲買の歴史について検討する。明暦3年(1657)の大火のあと、林産関係の問屋がすでに存在していたことが島田(1987)によって明らかにされている。問屋と仲買に分離したのは寛文または延宝期と推定されており、徐々に山方の生産者から問屋・仲買を経て消費者の手にわたるといふ流通機構が確立していった。これによって、問屋は山方から江戸市場に材木を導入する役割を担い、仲買は問屋から仕入れた材木の消費者への小売りを受け持つという各々の役割分担がなされた。これらの問屋・仲買は享保期に幕府より株仲間の公認を受け、この流通ルートを手取引は禁止された。江戸材木問屋には、深川木場材木問屋と、板材木問屋・熊野問屋組合(宝永期に連合)、川辺問屋の三系列があり、前二者は主に駿河・三河・遠江・紀伊方面からの下り荷や御用材といった移入材を扱い、後者は地廻り材と呼ばれる近郊産の木材を扱った。このうち川辺問屋は、関東奥筋の林業地帯から送られてくる材木や薪炭のほか、山方の雑品なども取り扱う問屋の総称であった。近世中期以降の江戸の人口増加などにより民間用材や薪炭などの生活必需品の需要が拡大し、それに従い雑多な商品を扱う川辺問屋の人数は増加した(丸山, 1996)。この川辺問屋の数は延享年間(1744～1748)に500軒を越えており、これは深川木場問屋・板材木熊野問屋が少数のまま増えていないのと対照的である(島田, 1987)。西川地方を代表する山村豪農で江戸に進出した武蔵国秩父郡上名栗村の町田家は、寛政期に川辺一番組古問屋の株を取得し生産・流通・販売まで自家で一貫したルートを確認し、直接取引を始めていた(丸山, 1996)。屋根職・船大工・桶職などの職人は用材を問屋から直接入手していた可能性もあるが(島田, 1992)、木棺用材はこれらの問屋や仲買を通じて製作者が入手したと考えられる。

## 6. 結論

崇源寺・正見寺跡から出土した木棺材はスギと、アカマツ、モミ属を中心としており、文献史料によると、その主産地は以上のように江戸近郊に求められる。17世紀後半頃までは、円形木棺に木曾川・天竜川流域や東北地方を主産地とするアスナロやヒノキなどの移入材が用いられていたのに対し、時期が下るにつれてスギやアカマツ、モミ属などの樹種に置き換わる。17世紀前半にかけて形成さ

れた東京都中央区八丁堀三丁目遺跡では、円形木棺の用材は木曾川・天竜川流域の天然林からもたらされた移入材であり、時期が下るにつれて森林資源枯渇の影響を受けた樹種の多様化や厚さの低下が認められている(鈴木・能城, 2004)。こうした江戸における天然林資源への依存と、その結果としての資源枯渇の傾向は17世紀後半頃まで続き、その後、スギやアカマツなどの、江戸近郊の天然林や人工林、二次林を主産地とする木材に用材が変化したが、崇源寺・正見寺跡で認められた。これら出土資料から得られた情報に、植生史研究の成果と近世の林業史を中心とする文献史学の成果とを併せて考えると、この背景には、木曾川・天竜川流域をはじめとした天然林資源の枯渇と、江戸近郊における江戸向け商品としての木材生産の活発化、なかでも18世紀頃に本格化したスギ・ヒノキを中心とする植林と、18世紀以降の、江戸と近郊とを結ぶ「江戸地廻り経済圏」(伊藤, 1966)の発達があると考えられる。とくに、川辺問屋の隆盛をはじめとする関東近郊における木材流通の発達によって生産された木材を江戸に流送することが容易になり、またこうした一連の流れに伴って農民的育林生産地域が発展した(西川, 1961)。

一方、崇源寺・正見寺跡から出土した円形木棺と方形木棺には、江戸近郊をおもな産地とするものの、それぞれ異なった用材選択が認められた。また両者の用材は、ヒノキやキリを専用とする将軍家や大名家の木棺用材とはまったく異なっており、当時の身分・階層の差が木棺用材に反映していた。しかし、円形木棺と方形木棺に用いられた樹種を見ると、両者の間に明確な材質の優劣は見出し難く、共通する樹種も認められる。また、崇源寺・正見寺跡出土の円形木棺用材には、森林資源の枯渇によると考えられる変化が認められたのに対し、方形木棺にはこれとは異なった変化が認められた。したがって、両者の用材の使い分けの背景には、木材の流通経路の違いなど多様な要因が内包されていると考えられ、身分・階層のみには還元できない。18世紀以降の江戸の墓において、甕棺が武士に用いられ、円形木棺はおもに広義の町人層に用いられたとされているが(谷川, 2004)、円形木棺と方形木棺の使い分けには、このような身分・階層の違いの影響を認めることは難しい。新宿区崇源寺・正見寺跡において認められたような、下級武士と町人層を主体とし、円形木棺・方形木棺・甕棺と蔵骨器が墓域の明確な区別もなく高密度で分布する江戸の墓には、これらの人々が比較的均質な葬制のもとに埋葬されていたと考えられる。

## 謝 辞

本研究を行うにあたり、谷川章雄氏(早稲田大学)、榎木真氏、大八木謙司氏(新宿区教育委員会)、牧野麻子氏、

惟村忠志氏, 土本医氏, 東早花氏はじめ大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部の各氏には調査時より多大なご助力とご助言を賜った。菊池徹夫氏はじめ早稲田大学考古学研究室の諸氏, 山田昌久氏(首都大学東京), 安藤広道氏(慶應義塾大学), 北條芳隆氏(東海大学)にはご助言を賜った。記して御礼申し上げる。また, 資料をご提供くださった崇源寺・正見寺墓域被葬者の方々に感謝し, ご冥福をお祈りしたい。

## 引用文献

- 藤田佳久. 1980. 近世における育林の成立時期とその地域差について. 徳川林政史研究所研究紀要 昭和54年度: 136-158.
- 飯能市史編集委員会. 1988. 西川林業. 「飯能市史 通史編」(飯能市史編集委員会編), 305-316. 飯能市, 東京.
- 林 弥栄. 1960. 日本産針葉樹の分類と分布. 202 pp. 農林出版, 東京.
- 井ノ口章次. 1977. 日本の葬式. 229 pp. 筑摩書房, 東京.
- 石井雄三郎. 1969. 工業. 「西多摩文化財総合調査報告 第3分冊. 東京都文化財調査報告書21」, 434-444. 東京都教育委員会, 東京.
- 伊藤好一. 1966. 江戸地廻り経済の展開. 311 pp. 柏書房, 東京.
- 加藤衛弘. 1982. 西川林業発生史に関する一考察. 徳川林政史研究所研究紀要 昭和56年度: 165-196.
- 河越逸行. 1965. 掘り出された江戸時代. 224 pp. 丸善, 東京.
- 児玉幸多. 1963. 身分と家族. 「岩波講座日本歴史10 近世2」, 225-271. 岩波書店, 東京.
- 蔵持大輔・鈴木伸哉. 2003. 埋葬施設の検討. 「東京都中央区八丁堀三丁目遺跡II」, 237-241. 八丁堀三丁目遺跡(第2次)調査会, 東京.
- 倉田 悟. 1971. 原色日本林業樹木図鑑, 第3巻. 259 pp. 地球社, 東京.
- 丸山美季. 1996. 近世西川地方における山方荷主町田家の江戸材木問屋経営. 学習院大学人文科学論集5: 1-31.
- 丸山美季. 2001. 林業 江戸を支えた材木. 「事典しらべる江戸時代」(林 英夫・青木美智男編), 302-312. 柏書房, 東京.
- 松村安一. 1959. 青梅の林業. 「日本産業史大系4」(地方史研究協議会編), 183-199. 東京大学出版会, 東京.
- 水本邦彦. 2003. 草山の語る近世. 日本史リブレット52. 99 pp. 山川出版社, 東京.
- 西川善介. 1961. 林業経済史論(5) —領主的林業地帯—. 林業経済148: 1-12.
- 農商務省山林局, 編. 1912. 木材ノ工芸の利用. 1308 pp. 大日本山林会, 東京.
- 扇浦正義. 1987. 常滑産大甕の編年的考察. 「自證院遺跡」(自證院遺跡調査団編), 177-181. 東京都新宿区教育委員会, 東京.
- 青梅市史編さん委員会. 1995. 青梅林業. 「青梅市史 上巻」(青梅市史編さん委員会編), 740-779. 東京都青梅市, 東京.
- 佐々悦久. 2002. 林業と筏. 「日の出町史 通史編中巻」(日の出町史編さん委員会編), 203-217. 日の出町, 東京.
- 島田錦蔵. 1987. 幕藩権力構造下の材木問屋仲間の行動. 徳川林政史研究所研究紀要 昭和61年度: 1-52.
- 島田錦蔵. 1992. 幕藩体制下の江戸材木商の商体(二). 徳川林政史研究所研究紀要26: 79-112.
- 鈴木 尚・矢島恭介・山辺知行. 1967. 増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体. 438 pp. 東京大学出版会, 東京.
- 鈴木公雄. 1988. 出土六道銭の分析. 「芝公園一丁目増上寺子院群 光学院・貞松院跡 源興院跡」(港区芝公園1丁目遺跡調査団編), 518-529. 東京都港区教育委員会, 東京.
- 鈴木伸哉・能城修一. 2004. 東京都中央区八丁堀三丁目遺跡より出土した江戸時代の木棺の形態と樹種. 植生史研究12: 75-86.
- 鈴木伸哉・能城修一. 2005. 崇源寺・正見寺出土木製品の樹種. 「東京都新宿区崇源寺・正見寺跡」(大成エンジニアリング株式会社編), 167-175. 宗教法人明治神宮, 東京.
- 大成エンジニアリング株式会社, 編. 2005. 東京都新宿区崇源寺・正見寺跡. 196 pp. 宗教法人明治神宮, 東京.
- 谷川章雄. 2004. 江戸の墓の埋葬施設と副葬品. 「墓と埋葬と江戸時代」(江戸遺跡研究会編), 224-250. 吉川弘文館, 東京.
- 寺島良安. 1712a (遠藤鎮雄編. 1980). 和漢三才図会 巻第31. 庖厨具. 「和漢三才図会1」. 日本庶民生活史料集成28: 457-473. 三一書房, 東京.
- 寺島良安. 1712b (遠藤鎮雄編. 1980). 和漢三才図会 巻第82. 香木類. 「和漢三才図会2」. 日本庶民生活史料集成29: 612-631. 三一書房, 東京.
- 所 三男. 1980. 近世林業史の研究. 858 pp. 吉川弘文館, 東京.
- 都立一橋高校内遺跡調査団, 編. 1985. 江戸: 都立一橋高校地点発掘調査報告. 647 pp. 都立一橋高校内遺跡調査団, 東京.
- Totman, C. 1989. The Green Archipelago: forestry in pre-industrial Japan. 297 pp. University of California Press, Berkeley.
- 辻 誠一郎. 1987. 最終間氷期以降の植生史と変化様式—将来予測に向けて. 「百年・千年・万年後の日本の自然と人類—第四紀研究にもとづく将来予想—」(日本第四紀学会編), 157-183. 古今書院, 東京.
- 辻本裕也. 1995. 植物化石からみた古植生・古環境. 「高島平北」, 49-106. 都立学校遺跡調査会, 東京.
- 吉川昌伸. 1992. 赤塚城跡遺跡第1地点の縄文時代晩期以降の花粉化石群集. 「赤塚城跡遺跡 昭和63年度~平成2年度予備調査報告書」(板橋区赤塚城跡遺跡予備調査団・板橋区教育委員会社会教育課編), 53-63. 板橋区教育委員会, 東京.
- 吉川昌伸. 1997. 溜池遺跡の花粉化石群. 「溜池遺跡 第II分冊」, 83-117. 帝都高速度交通営団, 東京.

(2006年6月14日受理)